



Title	ラフィク・シャミと「移動のドイツ語文学」(2) : 「第二世代」と『マルレーラの村の物語』
Author(s)	村上, 八重子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2012, 2011, p. 31-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77374
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ラフィク・シャミ¹と「移動のドイツ語文学」(2)

——「第二世代」と『マルーラの村の物語』——

村上 八重子

1. はじめに

1980年代後半から1990年にかけて、ドイツにおける外国人の問題は大きく様変わりをした。当初、他国から「客人(Gast)」として招聘してでも労働力不足をおぎないたかったドイツと、生活苦から祖国を離れざるを得なかった外国人労働者の要求は一致していたが、彼らが景気の後退にともなって、ドイツ以上に経済状況の悪い祖国に帰国するどころか、ますますドイツに定住を望み、家族を呼び寄せ、その数を増やすと共に、周囲との軋轢は社会問題に拡大し、ドイツ政府は外国人政策を早急に見直す必要性に迫られた。

この時代に作品を発表した移住作家たちは、出自や移住の理由にかかわらず、ひとくくりに「外国人労働者の文学(Gastarbeiterliteratur)」「外国人の文学(Ausländerliteratur)」と呼ばれた。ここでの「外国人」とは主にイタリア、ギリシャ、旧ユーゴスラヴィア、トルコなどから、ドイツ人の嫌う低賃金で厳しい労働条件の仕事を引き受けるためにやってきた「外国人労働者」と同意であった。現在では、外国人差別を助長するとして、移住の作家たちに対しては用いられていない言葉ではあるが、ラフィク・シャミのように大学留学を利用して、シリアからドイツに渡り、そのまま政治亡命を果たした作家についてもそれが用いられていることから、当時のドイツで「外国人」が現していたネガティブな意味が垣間見える。

しかし、ドイツの外国人政策がなかなか定まらないあいだにも、ドイツでの定住を求める外国人はさらに多様化する。多くは引き続き経済的理由によるものであるが、その中でも、家族がよりよい教育を受け、高収入を得られるような仕事につけることを目的とする移動が増えた。また、政治亡命による移住も増加した。出身国数の増加に関して言えば、

¹ ラフィク・シャミ (Rafik Schami) は1946年シリアの首都ダマスカス生まれ。正確にはアラブ人ではなくアラム人であり、一家はキリスト教徒である。長期間に及ぶ軍事政権下、発行人であった壁新聞を禁止され、作家への道を閉ざされたことなどの理由により、1971年に奨学金を得て渡独しそのまま亡命。宗教・民族・言語において少数派であることを幼いころから意識していたために、共存・寛容が作品の主要なモチーフ。おとぎ話や寓話の形をとった初期の作品は、『千夜一夜物語』に代表されるアラブの語りの伝統を受け継いだものとして受け入れられ、1985年には、ドイツ語を母語としない作家に贈られる、シャミツソー奨励賞を受賞。

入国許可が容易に手に入ったドイツ系の東欧人がまず多くドイツにやってき、続いてロシアをはじめとする東欧人が始めは亡命者として、冷戦終結後、EU 成立後は雪崩をうって西へと移動を開始する。政治的理由での亡命は現在よりも承認条件が緩やかであったこともあって、イランやシリア、アフリカ諸国やモンゴルなどからも大挙して押し寄せた。

結果、成人の就労問題と平行してその子どもたちに対する教育や、住居に関しての問題も加わった。これらの人々は、ドイツという国が持っていた肯定的なイメージに動機付けられていた点では、上述の「外国人労働者」と同じであるが、いくつかの相違点がある。ドイツ語が理解できる高学歴の人々や専門職についていたものはドイツでも比較的すぐに高収入を得られる仕事を見つけ、それ以外の人々は生活保護に頼ったこともそのひとつである。後者の数が多いのは当然で、新たな社会問題となった。

2. 「第二世代」

1981 年、シャミとフランコ・ビオンディ² は彼らの文学を「困惑の文学(Literatur der Betroffenheit³)」と呼んだ。⁴ 初期のシャミの作品に限らず、多くの移民作家にとって、「移住」と「外国人労働者」は重要なテーマであり、彼らがドイツで作家として成功するための、最初のステップとして非常に有効であった。⁵ 「困惑の文学」とは、その時期、ドイツという異国と「出会い(treffen)」、職場だけでなく、日常さまざまな状況に文字通り「襲いかかられた(betroffen)」移民たちの「困惑」がドイツ語で語られることで、ドイツ人にとっても同じく「困惑」を持って受け止められたことを現す表現である。

文字通りに捉えれば、「第二世代」とは、まずは、「第一世代」の子どもたちと考えることが出来る。この世代はドイツで教育を受け、もはや祖父母や親戚の住む両親の祖国こそが異国であるにも関わらず、家庭内ではその習慣が変わらず引き継がれていたのであり、ヴァインリヒ (Weinrich, 1983) が取り上げた、アキフ・ピリンチ⁶ の第一作である“*Tränen sind immer das Ende*(1980/81)”の、

„Im Grunde fühle ich mich selber nicht als Türke, aber auch nicht als Deutscher. Ich schwanke

² フランコ・ビオンディ (Franco Biondi) は 1947 年イタリア生まれ。18 歳のとき父の呼び寄せで渡独し、働きながら夜学に通い、大学へ進学。70 年代から最初はイタリア語で、後にドイツ語で執筆を始める。シャミと共に移民作家のための文学グループ「南風 (Südwind Gstarbeiterdeutsch、のちに Südwind と改名)」と、当時の西ドイツ在住で、文化的活動に関わる外国人のための「ポリクンスト、多国籍文学芸術協会 (PoLiKunst=Polinationaler Literatur-und Kunstverein)」の活動に従事した。1987 年シャミッソー賞受賞。

³ betreffen : (動詞) 襲いかかる、の過去分詞形 betroffen の名詞形。treffen : (動詞) 会う。

⁴ Franco Biondi / Rafik Schami: *Literatur der Betroffenheit*. In: *Zu Hause in der Fremde. Ein bundesdeutsches Ausländer-Lesebuch*, Christian Schaffernicht (Hg.), Reinbeck 1984(1981)参照。

⁵ 村上八重子「ラフィク・シャミと『移動のドイツ語文学』(1)」、『ポストコロニアル・フォーメーションズV』2010。

⁶ アキフ・ピリンチ (Akif Princici) は 1959 年トルコ生まれ。10 歳で両親と共に渡独、21 歳で最初の小説を発表。二作目のネコを主人公にしたミステリー *Felidae* で大成功を遂げる。

nicht einmal so in der Mitte. Eigentlich bin ich gar nichts.⁷

(実際わたしは自分自身をトルコ人であるとは感じていない。しかしドイツ人であるともまた思っていない。わたしはその中間で一度ならず揺れ動いている。本当のところ、わたしは全く何者でもないのだ。)

これがまさに「第二世代」のジレンマを正確に表現しているといえよう。また、ハム (Hamm) は「彼らは二つの文化の間で自らのアイデンティティを探し求める」「どこもうちではないという感覚を持つ」、とあらわしている。⁸ つまり、「第一世代」の作家たちが繰り返し強調した望郷の念や、シャミが彼らから離れる原因ともなった、「外国人」、特に「外国人労働者」に関する直接的な問題提起からはやや道を異にしている。

しかし、視点を変えて、この「困惑」の世代を「第一世代」とするならば、「第二世代」とは、その「困惑」から若干距離を持った世代だとも言える。

おぼつかないドイツ語で単純労働に従事し、ドイツ人に見下された「第一世代」とは違い、彼らの子どもたちの世代である「第二世代」は「第一世代」と続く「第三世代」への橋渡しを果たす世代であった。つまり、両親、祖父母の国をほとんど知ることがない「第三世代」へ、薄れていく記憶や文化、習慣を語り継ぐ役割を担ったということである。ドイツ語で語る、ということの持つ意味が「第一世代」と「第二世代」とで大きく異なるのはこの点である。「第一世代」にとっては、ドイツ人に向けて、外国人労働者の「困惑」を訴えるための、あるいは労働者同士が望郷の念を分かち合うための共通語としてのドイツ語であったが、彼らの子どもたちにとってはドイツ語もまた母語に等しい言語である。次の世代へ自分たちの移動の経験を語る際にドイツ語を用いることはごく当然である。

また、ドイツ人との橋渡しの役割もこの「第二世代」が請け負っていた。不完全なドイツ語で語ることを強調し、それによって彼らの抱える問題をつきつけた「第一世代」とは打って変わって、新たな言い回しや意味づけを積極的におこなうことがドイツ語をより豊かなものにすることに貢献している、と次第に認められるようになったのである。

最後に、ここでは個々の事例を取り上げないが、「第二世代」の作家たちを、移住者の出身国が飛躍的に増え、「ドイツ人と外国人」の図式のみならず、さまざまな言語や文化が活発に交流する状況が生まれつつあった中で執筆活動をした作家たちであるとも考えることが可能であると思う。また、増加した女性作家をもそこに含まれないだろうか。「第一世代」の中心をなすのは男性労働者であり、後に呼び寄せられた家族として渡独した女性は主に彼らの妻であり、娘であった。家族という単位は「第一世代」の人々にとってもっとも重要であり、外の世界は「異国」であり続けた。他方、亡命者にとって、ドイツ社会と

⁷ Weinrich, H.: *Deutschland – ein türkisches Märchen. Zuhause in der Fremde – Gastarbeiterliteratur.* In *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 26/03/1983. Auch in: *Deutsche Literature 1983. Ein Jahresüberblick.* Hg. von Volker Hage. Stuttgart: Reclam, 1984 参照。

⁸ Hamm, H.: *Fremdgegangen freigeschrieben, Einführung in die deutschsprachige Gastarbeiterliteratur.* Würzburg: Königshausen und Neumann, 1988 参照。

はひとまず安全な避難先であり、執筆の動機が「困惑」から出発したのではなかったと考えられる。よって「第二世代」の作家とは「第一世代」の子どもの世代であると共に、これらの女性作家たちも含まれると言ってよいと思う。すべての作家に個別の事情や背景があり、カテゴリー分けすることがますます困難かつ無意味になっていることは自明であるが、「外国人労働者の文学」と呼ばれる文学の時代があったことは事実であり、その時代の作家たちを「第一世代」とするならば、そこに続く時代を反映するような何らかの特色や共通点がありはしないか。そのためだけの区分であることはお断りしておく。

さて、シャミはこの時期、代表作のひとつとされる1989年の『夜の語り部 (*Erzähler der Nacht*)』を含めて非常に多くの作品を発表している。そこには「第二世代」の作家たちの役割としてあげた点も見られる。本稿では、シャミが1987年に発表した『マルーラの村の物語 (*Märchen aus Malula*)』の短編2編から、それらを探してみたい。

3. 『マルーラの村の物語』

シャミの両親はシリアのマルーラという村の出身である。村人はほとんどがキリスト教徒のアラム人であり、そのために少数派としてさまざまな迫害を受けた時代もあった。この短編集は上述した「次の世代への橋渡し」の典型と言えるであろう。前書きにおいて、作者自身と考えられる語り手はいかにこの物語を幸運にもドイツで手に入れたかを述べる。そして死んだ祖母がまだ生きていたら、きっとこんなふうに聞かせてあげたのに、と語り始めるのである。聞き手はドイツ人読者だけでないことは明らかで、ドイツ人をも含めた次の世代である。両親や祖父母、そのまたさらに昔の人々の物語を語り継ぐことが大事なのだ、と呼びかけているのである。それはマルーラだけの物語に限らない。ほとんどの物語が、多くの他の地域でも類似の話があるだろうと断りをいれているが、それは多くのおとぎ話や寓話が普遍的な内容を持っていることと、それらがあらかず教訓やメッセージにも普遍性を認めることができる、ということを示しているであろう。ただ、『タクラ、あるいはなぜおじいちゃんが四百年も武器を担いでいたのか (*Takla oder Warum mein Großvater vierhundert Jahre sein Gewehr trug*)』という短編では、聖女タクラをモチーフとした村人の抵抗の歴史が語られており、マルーラに直接関係する話となっている。自らの信念に従って抵抗を続けた王女と彼女を助けた村人たちの物語であるが、どんな犠牲を払っても信念を貫き通したことは語り継がれ、それを聞いた者の胸に新たに生きはじめるのだ。主人公の少年にこの物語を語るのは、彼の夢に現れる、亡くなった祖父である。祖父はなぜか四百年も銃を担ぎ、戦い続けているという。しかし、目覚めて両親に祖父のことを尋ねるが、そんな勇敢な話はされず、謎は深まるばかりだ。祖父は夜ごと夢の中で孫に語る。その昔、アラム人たちは強大な権力を誇っていたが、次第に没落してしまう。しかし、最大の危機に際して妖精が現れ、マルーラへ逃れるようにと教えてくれる。ただし、今後どんなことが起こっても、マルーラの村へ逃げ込む者に対して彼らの家と心を開き、受け入れてやると約束せねばならない。命を救われたアラム人たちはその約束を守った。険しい

岩場だらけのマルーラの村は、敵から身を潜めるのに好都合で、何度襲撃されても村人たちは生き延びてきた。父王の決めた結婚を嫌って城を逃げ出してきた王女タクラの場合も同じであった。だが父王はそれをあきらめず、彼女をかくまった村人の側にも、城の軍勢の側にも多くの犠牲者を出してしまう。それでもタクラと村人たちは屈しなかった。タクラの物語を終えた祖父はこう告げる。

„(...)Doch was vermag der Tod gegen einen solchen Menschen? Takla lebt in den Herzen der Malulianer und trotz der Zeit. Seit heute lebt sie in deinem jungen Herzen.“(136-137)

(しかし、このような人間に対して死が何ができるというんだ？ タクラはマルーラの村人たちの心に生きているし、時が経っても変わらない。今日このときから彼女はおまえの幼い心の中でも生きるんだよ。)

少年は、ダマスカス生まれでアラム語は話せない。しかし彼は、両親に祖父母の話をせがむだけでなく、その日からアラム語を学び始める。祖父のことをどれだけ好きかを伝えるために。間違いだらけのアラム語を祖父は笑うが、それは嘲笑ではない。そして孫の頭にキスをするために、担いでいた銃を降ろすのである。

この短編からはこれまでのシャミの作品同様、いくつかの明確なメッセージが読み取れる。しかし前の世代の経験を、次の世代へ引き継ぐことの重要性を最も強く理解できる。この短編集の訳者である泉千穂子は訳者あとがきにおいて、当時オランダに住んで、移民たちに混じってオランダ語を学んでいた経験から、

シャミがこの物語をドイツ語で書いたことの意味のひとつがわかったのです。それは、シャミがマルーラの物語を発見して感じたような興奮（第一話）を、ドイツやオランダでこの本を手にした移民二世、三世たちがきっと繰り返していくのだ、ということでした。⁹

と述べている。都市部にはすでに両親の母国語よりオランダ語になじんだ移民二世があふれる中で、オランダ語に訳されたこの本を見かけたときの感想である。

少年の祖父は、アラム語が理解できない孫のためにアラビア語で語るなのであるが、今度は孫がアラム語を学ぼうとする。物語を伝えるだけでは終わらず、両親や祖父母たちについて、そのひととなりだけでなく、彼らの故郷の文化や言語にも思いをはせることでそれらは生き続けるということを伝えているのである。

もう一編、『花男、あるいは微笑みの裏にある秘密 (*Blumer oder Das Geheimnis hinter dem Lächeln*)』で、シャミは苦い思いをする。笑うだけで木に花を咲かせることができることから花男と呼ばれる者がいた。サルタンに呼び出され、都に向かう途中、楽しげな若い農夫と、彼の上機嫌の理由を尋ねる畑の番人との会話を聞いてしまう。なんと、農夫は花男の

⁹ 西村書店、1996年参照。なお、本稿での日本語訳、下線は筆者による。

妻の愛人で、うちでは仏頂面の花男が留守の間に彼女に会いにいけるのが楽しみなのだ。ショックで一時は笑いを忘れた花男であったが、サルタンも花男を引っ立てた判事も共に妻に浮気をされていることを偶然知ってばかばかしくなってしまう。妻たちは愛人に、自分の夫がサルタンであること、判事であることをのぞけばどれほど人間としてつまらないかを語る。帰って妻を大事にしてやろう、と悟った花男を、サルタンも判事も信じずに、三人で世間を見て回って、どこも同じなのかを確認しようとする。貞淑な女も移り気な女もいたが、最後に三人は背中に大きな箱を背負った農夫に出会う。ひと月前に結婚したばかりの農夫は、妻のもとに誰か訪ねてこないか心配でしかたがないのだ。本当に一日中妻を背負っているのかと、サルタンは箱を開けさせる。するとそこに入っていたのは妻とその愛人の二人であった。

Der Bauer ließ den Kasten von seinem Rücken herunter und öffnete ihn; da fanden sie die Frau mit ihrem Liebhaber im Kasten. Die beiden sprangen heraus und suchte das Weite. Der Bauer schrie laut auf und wollte hinter den beiden herlaufen, doch der Sultan hielt ihn fest und versuchte ihn zu beruhigen. Die beiden Liebenden waren zwischen im nahen Wald verschwunden.(79-80)

(農夫は背中から箱を降ろしてそれを開けた。箱の中に彼らが見つけたものは、妻とその愛人であった。二人は飛び出して逃げようとした。農夫は大声で叫んで二人のあとを追おうとしたが、サルタンが引き止めてなだめようとした。二人の愛し合う者たちはその間に近くの森の中に消えてしまった。)

動詞 lieben「愛する」の現在分詞から派生した名詞の複数形 Liebenden「愛している者たち」という言葉を、シャミの編集者はどうしても認めようとしなかった。ドイツ語ではこの場合 Ehebrecher「婚姻関係を破壊するもの(複数同形)」となるべきだ、というのである。互いに妥協しないまま、初版では作者の許可なしに Ehebrecher が用いられていた。この編集者にとっては、移民作家はいつまでたっても誤ったドイツ語を使いがちである、と刷り込まれていたのである。偏狭な編集者に怒り、インタビューや創作日記などでこのエピソードをたびたび紹介していたシャミであるが、例えば同じ移民作家でもある多和田葉子¹⁰のドイツ語の捉え方に対する評価と比べると雲泥の差である。あるいは、イラン生まれの亡命作家サイード¹¹の大文字と小文字に対する繊細な感覚も大いに認められていることとも異なっている。実際、こういった創造的な試みの例については枚挙にいとまがないにもかかわらず、シャミには最初の「外国人労働者の文学」というレットテルが後々までついてもわっていたことがうかがえる。

第二版で元通りの Liebenden を取り戻したシャミは、1994年に童話『それはオウムじゃな

¹⁰ 多和田葉子は1960年東京生まれ。1979年渡独。1993年『犬婿入り』で芥川賞受賞。1996年シャミッソー賞も受賞している。

¹¹ サイード(SAID)は1947年テヘラン生まれ。17歳で家族の勧めでドイツへ亡命した。シャミッソー奨励賞受賞は1991年。

いの！(Das ist kein Papagei!)』を発表する。Papagei とはドイツ語でオウムのことである。主人公の少女リナ(Lina)の両親は、彼女の言うことになかなか耳を傾けてくれない。ペットを飼おうという話になったときも、彼女の意見などおかまいなしである。結局両親はオウムを買ってくる。犬ほど世話もいらぬし、ネコほど無芸でもないだろうという理由である。しかし、さっそくしゃべらそうとしても、オウムは一言も発しない。ますますやっきになる両親に、リナは何度も教えてあげようとする。「それはオウムじゃないの！」しかしかれらは取り合わない。

„Das ist kein Papagei“, widerholte Lina bestimmt.

„Wenn es kein Papagei ist, was dann?“, sagte der Vater. „Ein Pinguin vielleicht?“

„Nein, ein Mamagei!“

„Stimmt!“, sagte der Vogel.

„Er spricht, der Papagei spricht!“, staunte der Vater.

„Es ist kein Papagei“, verbesserte ihn die Mutter schnell, denn sie sah, dass der Vogel beleidigt die Augen schließen wollte.(22-24)

(「それはオウムじゃないの」リナは断固繰り返しました。

「それがオウムじゃないのなら、いったいなんだ？」お父さんは言いました。「ペンギンかな、ひよっとして？」

「ちがう、Mamageiよ！」

「そのとおり！」と鳥は言いました。

「しゃべった、オウムがしゃべった！」お父さんはびっくりしました。

「それはオウムじゃないわよ」お母さんはお父さんの言葉を急いで訂正しました。鳥が気を悪くして目を閉じようとするのがわかったからです。)

このオウムはメスであり、パパと呼びかけられるのがいやで口をきかなかったのである。Papagei の Papa の部分をうまく使った愉快的落ちなのであるが、これはドイツ語以外では翻訳がむずかしい言葉である。これまでに同様の物語がなかったのが不思議であるが、これもまた、ドイツ語を母語としない作家ならではの気付きであろう。

ようやく自分の声を届かせることができたリナは両親に教える。Mamagei は他人が言ったことを繰り返すことなどしない。それをするのは Papagei だけであると。Mamagei は自分が見聞きしてきたことを自由に語って聞かせるのである。ここにもシャミならではの風刺が効いている。そしてアラブの口承文学の伝統もまた生かされている。

以上、簡単ではあるが、「第一世代」「外国人労働者の文学」とは異なる「第二世代」の特徴をシャミの作品からも見ることができた。モチーフが明確である短編を取り上げたが、この時期シャミは長編を発表することが増え、そこにおいても同様に、直接的な問題提起は新聞への寄稿や、テレビやラジオでのインタビューにその場を移している。

4. おわりに

1980年代後半から1990年代、ほぼ毎年のように作品を発表し、メディアに登場し、朗読会でドイツ中をツアーし、と精力的に活動したシャミは、1992年と1995年に『正直なうそつき (*Der ehrliche Lügner*)』と『夜と朝のあいだの旅 (*Reise zwischen Nacht und Morgen*)』という2冊の長編を発表した。この2作ではどちらもサーカスをモチーフにしており、「移動」が重要なテーマのひとつとなっている。しかし、移動し続けるサーカスとはその過程でさまざまな経験を通して人生を豊かにできる機会であると同時に、定住地を持ち得ないものなのであり、それはこの時期のシャミがたとえ作家としてドイツで成功を収め、ドイツ人女性と結婚して家庭を持ったとしても、精神的にはいまだ定住地を見出していないということも現している。二つ（あるいはもっと多くの）文化の中で揺れ動く「第二世代」の作家たちにとって、移動とは「第一世代」以上に定住を最終目的とするものであり、彼らはそれがかなったように思える状況においてさえ、何らかの欠落感を抱き続ける、その感情が常にうかがえるような作品を生み出してきたといえる。設立時に「外国人労働者」をグループ名に含んでいた「南風」を離れたシャミは、むしろ「第二世代」により多くの共通点を持っていたのではないだろうか。もちろんそれは、彼が「南風」の頃と同じく、時代の波にうまく乗ったということでもあろう。

では、移民の「第三世代」、「第四世代」すら登場する現在、シャミの活動はやはりその波をとらえているのだろうか。多言語や多文化の状況はますます広がっており、ドイツに住みながらドイツ語以外の言語で活動する作家もあらわれた。「移動」に関しても、もはやドイツをはじめ、いずれの国も定住地ではない、逆に定住地を求めず、単なる通過点として旅を続ける、という考えを持つ作家もいる。一例をあげると、アンナ・カズミ・シュタール(Anna Kazumi Stahl)は、ドイツ人の父と日本人の母を持ち、ニューオーリンズで生まれ育ったが、ドイツとスペインの大学に学び、ブエノスアイレス在住で、執筆はスペイン語でありながら、その作品には日本的な要素を取り込んでいる、といった具合である。作家をある特定の出自と結びつけて分類することはもはや不可能になっている時代に「世代」もまた意味をなさなくなりつつある。それでも「移動」だけはますます重要性をましているのであり、その体験が作品の質を決定的に左右することには変わりがない。また、2011年以来、祖国シリアでは不安な政情が続いている。自らの信条に基づいて四百年戦ったマールラの人々の物語がまた繰り返されている。シャミの作品に今後大きな影響を与えるであろうことは容易に想像できる。

その他の主要参考文献

- Chiellino, C.: *Am Ufer der Fremde, Literature und Arbeitsmigration 1870-1991*. Stuttgart: Verlag J.B.Metzler, 1995.
- Chiellino, C.(Hrsg.): *Interkulturelle Literature in Deutschland Ein Handbuch*. Stuttgart: J.B.Metzler, 2007.

Joos, E.(Hg): *Damals dort und heute hier*. Freiburg: Herder, 1998.

Saalfeld, v.L.(Hg): "Ein ehrlicher Lügner" In: *Ich habe eine fremde Sprache gewählt. ausländische Schriftsteller schreiben deutsch*. Gerlingen: Bleicher, 1998.

SAID : *Dieses Tier, das es nicht gibt*. München: C.H.Beck, 2001(1999).

Schami, Rafik: *Märchen aus Malula*. München: dtv, 2000 (1997).

Das ist kein Papagei! München: dtv, 2007(1994).

Sieben Doppelgänger. München Wien: Hanser, 1999.

Tawada, Yoko: *Talisman*. Tübingen: Konkursbuch, 1996.